



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本の都市に嫁いだ中国人女性：結婚までの経緯と結婚後の適応の過程 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	張, 玥
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第15105号
Issue Date	2022-06-30
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/86423">https://hdl.handle.net/2115/86423</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	ZHANG_Yue_abstract.pdf, 論文内容の要旨



## 要旨

日本の都市に嫁いだ中国人女性  
—結婚までの経緯と結婚後の適応の過程—

「ムラの国際結婚」の発生を契機とし、農村における国際結婚に対する研究がなされ、農村に嫁いだ外国人女性の結婚までの経緯、結婚後の適応の過程が明らかになった。しかし、農村に比べて都市での国際結婚に対して、十分な検討がなされず、都市に嫁いだ女性の生活実態が明確になっていない。本研究の目的は日本人男性と結婚する外国人女性のうち最多の中国人女性を対象を限定し、日本の都市に嫁いだ中国人女性たちの結婚までの経緯（①結婚の動機）、結婚後の適応の過程（②夫婦関係、③家庭内と地域社会における生活の課題、④社会的ネットワーク）を明らかにすることである。研究方法は、農村に対する先行研究の知見と都市を対象にした調査結果とつぎ合わせながら、結婚時期世代（以下、世代）の違いも考慮し都市の特徴を浮き彫りにする。

まず、第一章において、①結婚の動機について分析を行った。その結果、世代別に都市と農村の違いがみられた。「発生期」（1999年以前）に結婚した女性の場合、農村に居住する女性の多くは中国農村の出身者であり、彼女たちは「貧困」から脱出するため、業者婚、見合い婚を介し来日した。一方、都市に住む女性の多くは中国都市出身の者であり、彼女らは「貧困」ではなく、「愛情」を理由に結婚に至った。「急増期」（2000年－2009年）に結婚した場合、農村に嫁いだ女性と都市に嫁いだ女性の両者とも「経済的要因」「ジェンダー的要因」が結婚移動の主要因となっていた。しかし、その動機の内実は異なっていた。「経済的要因」について、農村に嫁いだ女性の場合、中国国内における都市と農村の格差が結婚移動のプッシュ要因となっていたのに対し、都市に嫁いだ女性の場合、中国都市内部での格差が国際結婚移動を生み出した。「ジェンダー的要因」について、農村に居住する女性の場合、中国で「農村出身の出稼ぎ女性」という立場によって周辺化されていたのに対し、都市に居住する女性の場合、中国で「離婚の経験を持つ女性」という立場によって周辺化されていたことがプッシュ要因となっていた。

第二章では、②夫婦関係を検討した。先行研究では、農村において、夫婦の間に大きな問題が生じてはいないとされていた。その理由は、結婚動機は愛情ではないものの、自らの選択によって国際結婚をしたという自覚が夫婦に共通しており、この自覚こそ問題を克服する動機づけとなっていたためであると示唆された。しかし、都市の場合、農村においてみられた、ともに愛情を持たないパターン以外にも、恋愛結婚のパターンが存在した。しかし、妻には愛情があるものの夫が愛情を持たない場合、あるいは妻の方が愛情以外の動機もあって結婚する場合も存在し、その夫婦には価値観・文化の違いや対等ではない関係など深刻な問題がある。ただし、女性たちは同国人ネットワークを利用し、ストレスの緩和を図っている。他方、夫婦ともに愛情を持たない場合でも農村の状況とは異なっており、動機その他、年齢差、人的ネットワークも夫婦関係に影響している。加えて、世代的な違いを見ると、第一章で明らかになった女性の結婚動機を反映し、夫婦ともに愛情を持たないパターンは「急増期」に集中しており、ともに愛情を持つ、あるいは片側が愛情を持つパターンは「減少期」に多いことがわかった。

第三章では、③家庭内と地域社会における生活の課題について考察した。先行研究では、農村において、日本人家族と意思疎通がうまくできていないこと、イエ規範をめぐる衝突が生じたことはストレスにつながっていたと示唆された。一方、都市の場合、夫婦間コミ

コミュニケーションは農村よりスムーズであったものの、文化差による葛藤は夫婦の間に集中していた。さらに、都市に住む女性たちにとって、家庭内問題にとどまらず、地域社会における就労、偏見・差別、人間関係などの問題も存在し、ストレスの要因が複雑化している。これらの問題に関して、夫婦コミュニケーション・文化差などにおいて世代差がみられず、就労、偏見・差別などにおいて世代差がみられた。就労に関して、滞在期間が短い世代ほど言語の壁により安定した仕事が見つからない傾向にある。偏見・差別の問題について、中長期滞在者の場合、職場差別を経験していたのに対し、滞在期間が短い世代の場合、職場以外の社会生活領域に偏見・差別を感じていたことがわかった。

第四章では、④社会的ネットワークを考察した。先行研究では、エスニック・コミュニティを構築し難い農村に住む女性の場合、地域社会に溶け込む意識が強い。同国人ネットワークは日本人ネットワークに従属する形で働いていると示唆された。一方、都市の場合、エスニック・コミュニティを構築しやすい背景の下、すべての世代において、同国人ネットワークを中心に、日本人ネットワークを補助的に使い分けていることがわかった。こうした同国人ネットワークは家庭内、地域社会での生活の課題に対し、悩み相談や仕事の紹介などの機能を有する。ただし、「急増期」に結婚した世代には日本人ネットワークを中心とする人もいる。しかし、それは同国人ネットワークの空白を補うためであり、日本人との関係作りは同国人ネットワークから影響を受けていることに変わりはない。

終章ではこれまでの議論を要約した上で、アジア系外国人結婚移民研究への貢献を提示した。第一に、研究上の示唆について、(1)本研究は今まで注目されてきた農村の業者婚、見合い婚とは別に、都市の恋愛結婚に視野を広げた。そして、日中国際恋愛結婚も含めて検討する際に、(2)農村と対比する工夫を行った。農村に対する先行研究の知見と関連付けながら都市の特徴を明らかにした。こうした農村との付き合い合わせを行う際には、(3)結婚前後の過程に目をむけ、さらに家庭生活に留まらず社会生活も視野に入れ、できる限り多くの要素を取り入れることで移住生活全般を捉えた。加えて、日中国際結婚が発生してから一定の期間が経過していることから、いくつかの国際結婚世代が誕生している。この点を踏まえ、(4)世代差をみる視点を導入し、世代の違いを考慮しつつ全体像を把握した。第二に、調査実践について、従来の日本人男性と中国人女性の結婚に関する研究には、ケース数が少ないこと、量的研究と質的研究のどちらか一方にのみ偏っていること、日本人男性に焦点がむけられていないことなどの限界がある。本研究はそれらを補い、(1)100人を超えるアンケート調査(120人)と夫婦ペア(15組)のインタビュー調査を実施した上で、(2)夫婦それぞれの立場からデータを収集した。その結果として、今まで軽視されてきた日中国際結婚夫婦の動機、生活の課題などを見出した。

以上の考察を踏まえ、今後の課題として次の点があげられる。第一に、緊密な人的ネットワークを持っていない女性たちの適応状況を検討すること。第二に、結婚動機、その後の婚姻生活において日本人男性たちの全体的特徴を把握すること。第三に、子どもの成長に伴い、経時的な視点で子育てを検討すること。第四に、母国にいる両親の扶養の問題について、今後さらなる研究が必要である。